

活動報告書

報告者氏名：小島 美和 所属：東大阪市立花園北小学校 記録日：平成31年2月23日
キーワード：小中連携、学び方、自信、書き支援、SNS

【対象児の情報】

- ・学年 中学校1年生
- ・障害名 自閉的傾向が強い（起立性調節障害）
- ・障害と困難の内容
 - ・自閉的傾向が強く、低学年時より市の療育センター内診療所に定期的に通うも、その点については診断にはいたっていない。
 - ・知的な遅れは見られないが、高い言語理解と知覚推理に比して、ワーキングメモリと処理速度に大きな課題を抱えている。（3年前のWISC-IV検査より）
 - ・昨年度行ったURAWSSの結果、
読み速度・・・A（2標準偏差以上速く、読解全問正解）、書き速度・・・C（平均の1/3程度）、
書き介入速度（iPad・五十音入力）・・・B
と読み速度が非常に速いのに対して、書き速度が非常に遅い。
 - ・小学校では通常の学級での活動を主に教育課程を組んでいたが、中学校進学後は、支援学級在籍となり、生活の基盤を支援学級の教室においている。
 - ・本年度夏ごろより、朝起きられないことが続いた。血圧も上がらないことから受診し、10月に起立性調節障害と診断された。

【活動進捗】

- ・当初のねらい
小中連携する中で、小学校時代に身に着けた「学びの方法」の継続を保障し、対象生徒にとってより学びやすい方法へ展開していく。
- ・実施期間 平成30年4月～平成31年2月
- ・実施者 小島美和・山本諭志・辻村俊
- ・実施者と対象児の関係
 - 小島美和・・・小学校在籍時の通級指導担当者、現・小中一貫担当
（今年度は月に1回程度、中学校に行き、教員にアドバイスをを行っている。
対象生徒とは数か月に一度会い、担任を交え学習方法の確認を行っている。）
 - 山本諭志・・・中学校支援学級担任（対象生徒に対しての実践の担当者）
 - 辻村俊・・・中学校特別支援教育コーディネーター（対象生徒の英語科担当）

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

①生活面について

- ・朝が苦手で、小学3年生より1時間程度の遅刻で登校。5年生11月より大幅な遅刻に加え、欠席も増加した。6年生より「By Talk for School」で、教員とやりとりをはじめ、見通しを持つことにより2学期と3学期は自発登校ができるようになり、欠席はなくなった。しかし登校時刻は遅く、昼前後になることが多かった。

- ・感覚面（特に聴覚）で過敏なところがあり、ざわざわしているところだと集中できなくなる。その上、他人の会話が気になることもあり、通常の学級での活動が苦手であり、5年生3学期より別室登校していた。
- ・友だちから誘われることによって、行事等の練習に参加できるようになった。気持ちを作るのに時間がかかるが、通常の学級に入ってしまうと、最後まで参加できる。役目を果たそうという意識も強い。
- ・集中したいとき、大人数の中で活動するときなどは、デジタル耳栓を使用している。

②学習面（特に「書くこと」）について

- ・小学校で習う基本的なことに関しては一通り理解できている。
- ・「自分は書くことが遅く、書くという活動はあまりしたくない」と書字活動への苦手意識がある。書き始めるまでの気持ちを作るのに時間がかかる。特に、作文や記述問題のように、文章を作ることにしては、拒否が強い。
- ・「魔法の言葉」での取り組みにより、iPad を使って調べたり、まとめたりするという自分なりの学習方法は定着したが、学校で学習できる時間も少なく、中学校進学で、課題が増えることに対して不安を抱えている。
- ・中学校での定期テストについては、広範囲であり、量も多いことから取り組めるのかどうか不安を抱えている。

○活動の具体的内容

①新しい環境や、人になれるために（昨年度・・・小学校時代からの交流の場の設定）

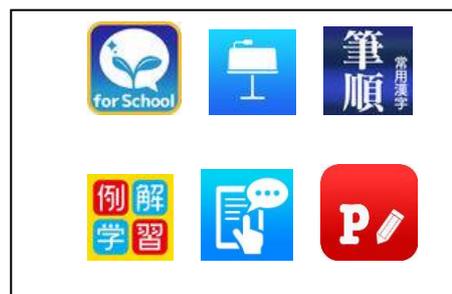
○6年時、学期に2、3回「中学校登校」を実施した。

- ・建物や支援学級の見学
- ・中学校の実際の授業へのiPad を持ち込んでの参加（詳細は「魔法の言葉」参照）
- ・クラブ体験では興味のある科学部に参加

②学習方法継続のために（3月～4月・・・有効だった手だてや学習方法の共有）

○入学前に、中学校教員と情報共有をした。

- ・学年担任団との引継ぎ会
 - 「魔法の言葉」のポスター等で今までの取り組みを紹介することで、対象生徒の学びの方法やそれを必要とする彼の特性を理解してもらう。
 - 教科学習に使用できそうなものを教員にイメージしてもらうため、小学校時代の学習成果物を見せた。
- ・対象生徒を交えての支援学級担任団との話し合い
 - 対象生徒がiPad を使っている場面を実際に見せることで、継続して取り組めることが見つかった。
- ・継続して取り組んだ学習
 - ア) 「By Talk for School」による予定管理
 - イ) 「By Talk for School」によるコミュニケーション
 - ウ) 辞典アプリやインターネットで調べたものを「Key note」にまとめる。
 - エ) 課題量の調整、「タッチ&リード」や「phonto」を使用したワークへのテキスト入力



③実際の中学生活での課題解決に向けて（4月～・・・新しい場での課題への対応）

- ・中学校区共有フォルダを活用した、教員間の課題共有と協議
- ・月に1～2回、教員間の対面での話し合い
- ・今年度の6年生と「中学校登校」をした際に、対象生徒のいる支援学級全体を観察して協議に生かす
→中学校との日常的な情報交換ができる連絡体制を整えることで、新たな取り組みが必要になった際の協議が容易になった。

カ) 情報量の増加に対応するための物理キーボードの導入

キ) 方法を比較しての定期テストの実施方法の検討

ク) 実験動画を編集しながら復習して、他の生徒の授業にも活かす

ケ) 動画授業（家で「ホントにわかるシリーズ」を視聴）と

ワーク（学校で）を連動した学習



→対象生徒にとって学習イメージのない英語科の学習については、特に重点的に取り上げて学習方法を検討した。

コ) 「Key note」を使った学習の記録

○対象児の事後の変化

①新しい環境や、人になれるための取り組みから

- ・繰り返し訪れたことで、「知らないところ」ではなく「あの場所」という見通しにつながった。
- ・自分の学習方法が中学の授業でも使えたことで、入学後の学習への意欲が出てきた。
- ・知っている先生も増え、クラブでは仲の良い支援学級の先輩と一緒に実験ができたことで、「あの人のいる場所」という安心感につながった。
- ・複数回の関わりと、多様な場面での対象生徒の様子を見てもらえたことで、中学校側もどのように受け入れていけばよいのか、考えるきっかけとなった。



昨年度のクラブ見学。
このクラブ顧問が現在、対象生徒の実験を考えている。



昨年度の中学校登校で、中学校での授業もイメージできた。

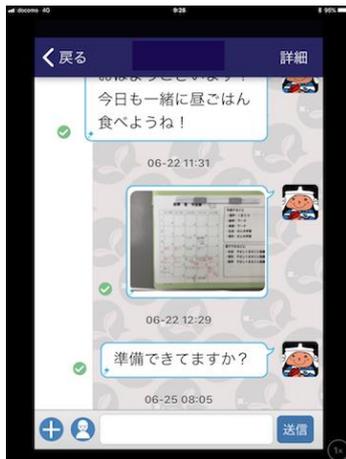
②学習方法継続のための取り組みから

ア) 「By Talk for School」による予定管理

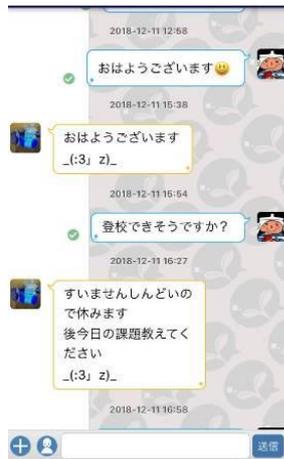
- ・入学直後から「By Talk for School」で、行事や学習予定などを中学校教員と確認してきた。見通しを持たせたことで、スムーズに中学校生活がスタートできた。登校時刻は昼前後ではあるが、1学期間欠席はなかった。
- ・夏休み以降、体調面で欠席する日数は増え、登校時刻も大幅に遅くなった。しかし、行事や課題の予定を送ることで、体調が悪い中でも「この活動があるなら、ちょっと早めに行こう」「頭痛がある。明日は楽しみにしている活動がある。今日は家でできる課題をするので、明日に備えて休もう」など、自分で調整しながら、見通しを持って生活を送ることができた。

イ) 「By Talk for School」によるコミュニケーション

- ・「By Talk for School」は報告者、支援学級担任、通常の学級担任、対象生徒で設定を行った。
- ・報告者も対象生徒と直接コミュニケーションをとり、アドバイス等を行うつもりだった。しかし、つながる相手を「この人」と決める傾向にあり、支援学級担任とのやりとりに一本化されるようになった。
- ・そこでは、自分の体調を伝えたり、試してみたいアプリを相談したりと、双方向のやりとりが出てきた。
- ・報告者は応援メッセージを送るだけとなり、数か月に一度の話し合いで会うことになった。
- ・2学期以降、スタンプによる送信はほとんどなくなり、言葉で体調のことや学習課題のことについて伝えられるようになった。また、体調や課題に向けての詳しいことについては、電話で、担任と話し合うことも増えてきた。



予定の連絡をして、見通しを持たせている。



小学校時代はスタンプが多かったが、言葉+顔文字が増えた。



試してみたいアプリを見つけて提案することもある。

ウ) 辞典アプリやインターネットで調べたものを「Key note」にまとめる。

- ・新出漢字学習・・・自信を持っている学習なので、入学直後から自ら取り組み始めた。

塊	部首	つちへん(土)
	音読み	カイ
	訓読み	かたまり
熟語	塊根・金塊・山塊 塊状 一塊	
文	塊状の水を割る。	

渴	部首	さんずい(氵)
	音読み	カツ
	訓読み	かわ(く)
熟語	渴望・渴水	
文	遊んだ後は喉が渴く。	

中学校でもこの方法で！
と、毎日欠かさずに取り組んでいる学習。
相変わらず、難しい熟語を選んでいる。

- ・社会学習・・・調べた後に「Key note」



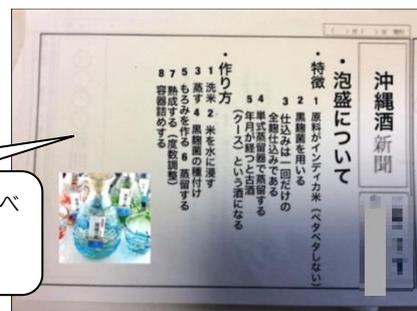
画像を検索して挿入。説明をテキスト入力している。小学校時代と同じ方法。教科によって背景のデザインを変えたり、アニメーションをつけたりして楽しんでいる。

・教科学習以外でも使用



学校紹介のスライドに進んでアニメーションをつけた。

平和学習の取り組みで沖縄の酒について調べる担当になり、まとめることができた。



工) 課題量の調整・ワークや問題集へのテキスト入力

- ・他の生徒と同じワークをするときに、課題量を調節し、iPad を利用した。その他にも、日々の学習成果物を教科担任に提出することが、認められるようになってきた。

③実際の中学生活での課題解決に向けた取り組みから

力) 情報量の増加に対応するための物理キーボードの導入

- ・物理キーボードの導入により、ローマ字テキスト入力による処理が速くなってきた。全画面を見られることもあり、自分でも「やりやすい」と言っている。iPad の操作がローマ字入力になったため、学校のパソコンを操作することも慣れてきた。



キ) 方法を比較しての定期テストの実施方法の検討

- ・1学期の2つの定期テストで手書きとテキスト入力（パソコンの excel 画面に入力する）の比較をしたところ、本人のモチベーションはテキスト入力の方が高かった。しかし、手書きとテキスト入力による点数の違いは出なかった。また、広範囲であり、問題数が多いことによる戸惑いから、解答を書けるところが少ないという課題が見つかった。
- ・報告者、支援学級担任、対象生徒とで話し合った結果、まずはテストの時に「わかる」「できた」と思えるように、2学期は次のように取り組むことになった。
 - 本児が学習した内容を、テスト問題の中から抜粋して実施していく。
 - 解答方法については、数学のみ手書きで行い、その他の教科はテキスト入力で行うことにする。
- ・2学期以降、体調の影響で学習量が大幅に減った。しかし、学習した箇所を中心に抜粋することで、テストに抵抗なく、意欲的に取り組むことができた。点数は取れないが、対象生徒は「やりやすい」と言っている。

10	10	20	10	10
くびようし	家雨	産る	神	
懐く	懐く	懐く	審判	
ひゆ	遠征	峠	押く	
さいそく	迫る	迫る	蜜蜂	
しずく	はず	遅刻	天井	

第一学年 国語科 二学期中間テスト 解答用紙

3

10	10	20	10	10
くびようし	家雨	産る	神	
懐く	懐く	懐く	審判	
ひゆ	遠征	峠	押く	
さいそく	迫る	迫る	蜜蜂	
しずく	はず	遅刻	天井	

第一学年 国語科 二学期中間テスト 解答用紙

18
20 !! (50) 330!!

+

ク) 実験動画を編集しながら復習して、他の生徒の授業にも活かす

- ・放課後に、理科教員と行った実験を動画で撮影し、「ロイロノート」で編集した。そして、それを見ながら他の支援学級生徒とも一緒に復習した。実験も楽しくでき、編集作業も思っていたより簡単で、友達にも「わかりやすい」と好評であった。

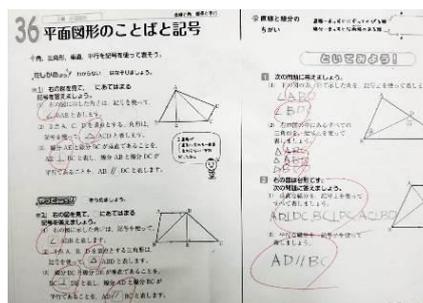


結果
輪ゴムは固まりました。



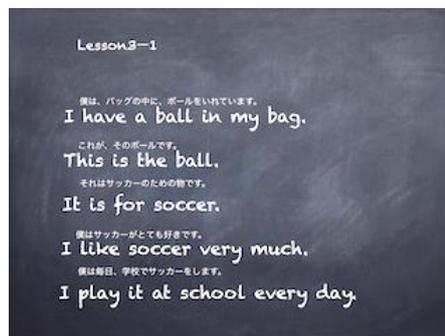
ケ) 動画授業（家で「ホントにわかるシリーズ」を視聴）とワーク（学校で）を連動した学習

- ・数学は、動画と問題集が連動していることで、自分の力で解ける問題が増えた。



コ) 英語学習は「Key note」を使って

- ・1学期間かけて、英語の学習方法を対象生徒も交えて検討した。その結果、「勉強したことを残したい」という対象生徒の気持ちも尊重しながら、得意な黙読と「Keynote」を使ったまとめ学習を組み合わせることになった。
- ・2学期以降は体調面から、国語・社会・理科を中心に取り組むことになり、英語にかける時間は少なくなった。「Keynote」の取り組みは余裕があるときに行い、「教科書を見ながら、ヒアリングを行い、そこに書かれている内容について教員に伝える」ことを中心に取り組んだ。



【報告者の気づきとエビデンス】

①中学校登校の中で、自分の学習方法を見てもらい、小学校と同じように対応してもらえたことで、安心して中学校に進学できたのではないかと。

大きく環境が変わっても、自然に中学校生活をスタートさせ、1学期間、遅刻しながらも毎日登校し、遠足や運動会などの行事にも全て参加できた。運動会の係活動にも積極的に参加し、6月と7月は通常の学級の終礼にも必ず参加できるようになっていた。

②小学校での学びを継続できたことで不調の時期でも学習し続けることができたのではないか。

2学期以降、体調を崩し、欠席や夕方の登校が続いているが、小学校時代から取り組んでいた「Key note」での学習は家でも行なっていた。特に漢字学習はほぼ毎日行い4月から2月7日までで、187字に取り組めた。

社会のまとめ学習も、国語と同じようにこつこつ取り組んだ結果、歴史上の人物40人についてまとめることができた。



中学校教員からの報告

現在の彼は度々の欠席と遅い登校があるものの、毎日の電話連絡で「遅くなってもできる限り学校へ行きたいです」「漢字は家でできるのでやっておきます」など、登校や学習への意欲を見せています。これは、毎日「By Talk for School」でやりとりを続けながら彼の気持ちや考えを共有できたことが大きな要因だと思います。また、iPadは彼が自信を持って使いこなせる道具であり、彼の相棒でもあります。それを使用して学習することを中学校で認められていることによって、彼が安心して学校生活を送ることができました。

③中学校側と話し合いをする度に関係教員が増えたことで、対象生徒の理解者が増え、より彼の興味のある学習が引き出されていったのではないか。

理科の教員が放課後に実験を企画したときに、実験開始までに登校できた。そして、実験に楽しく参加でき、撮影した動画を後で見返して「ロイロノート」を使用して編集もできた。理科教員との実験が楽しく、その後も数本の作品を作ることができた。



【最後に】

今回のプロジェクトに関しては、報告者が中学校に働きかけるという形で取り組んだ。昨年度から対象生徒と中学校、双方に「学びの方法」を手渡せるように考えてきた。

中学校側からも、このようにコメントをいただいている。

今回の取り組みでは、本校の支援学級の中で「多様な学び方があって当然であり、決して特別なことをしているわけではない」という考えが共有されました。校内では、学習活動やテストの実施方法を模索していく中で、学級担任、支援学級担任、教科担任等、多くの先生に協力してもらいました。対象生徒以外にも、学習方法を見つけられたことで以前より意欲的に学習に取り組める生徒も増えました。独自の学び方や課題に対する評価についても、学校の中で協議が始まりました。このようなことに気づかせてくれたプロジェクトに感謝いたします。

今後も小中一貫の取り組みの一つとして、小学校と中学校が行き来しやすい環境と定期的な話し合いを継続し、生徒にも、学校側にも「取り組みやすい」学習方法を、小学校と中学校の教員が一緒に考えていきたい。また、独自の学びに対する評価については審議中であるので、中学校ブロックで継続審議していきたい。